

福井県内科医会学術講演会

特別講演 2「漢方と免疫」

座長 あらい内科クリニック 新井芳行

演者 日高徳洲会病院 院長 井齊偉矢 先生

漢方薬の薬効を理解するには、西洋薬の作用機序を説明するのに用いられる現代薬理学とは違う薬理学を考えなければならない。西洋薬は合剤を除けば基本的に一種類の主成分からなり、それが体内でどのように代謝され、どこの作用点に作用して薬効を示すのかという説明方法が取られる。しかし漢方薬には主成分というもの存在せず、その構成は、1 個 1 個は到底薬効を示すことが出来ないほどの微量の数千種類（場合によっては 1 万種類以上）の化合物の集合体である。これらが一齐に体内に入って数千の作用点を刺激することにより、体からシステムを正常化するように働く response を引き出すことにより、結果として自力で不具合を正すように働く。あたかもオプジーボの作用機序に類似する。そして、漢方薬は基本的に抗炎症薬なので、免疫系を正常化して感染症に対峙することが、その作用機序の基本になる。

中医学（中国の伝統医学）の起源は紀元前 1,300 年以上 前、中国最古の夏王朝に次ぐ殷王朝の時代と言われています。その後、漢王朝の時代に、基礎医学と臨床医学を扱う「黄帝内経」、薬物学書「神農本草経」、医学書「傷寒論」という中医学の三大古典が成立し、基盤を確立しました。中国では複数の生薬を配合した薬を 200 – 300 年か行けて開発しています。その後遣唐使の時代に仏教の伝来とともに、中国から医学や生薬が伝えられました。聖徳太子は、四天王寺に施薬院を設け、薬草の栽培や調合を行わせたと言われています。

後漢時代(AD25~220)の著で中国最古の薬物書といわれる『神農本草経』に収録されている、数多くの薬物から推測することができます。

身体の変化に関係なく一律に効果を発揮する西洋薬に対して、漢方薬は微量成分が刺激しあうことにより患者さんの体の中で、自力で変調を起こしたシステムを正常化できる。その機序は科学的に解明されつつあります。例えば漢方薬に

含まれる何百という化合物の機能や作用には、感染症の防御にも役立つ自然免疫を底上げする「免疫賦活作用」が、わずかずつでも潜んでいると言われていいます。漢方薬の中に含まれる、糖鎖の長く連なった高分子化合物の多糖体が血液中の自然免疫を担う細胞の一種であるマクロファージの異物排除能力を上げる、あるいは抗体産生に関わる作用を持っています。また補中益気湯には、獲得免疫である T 細胞の一種「制御性 T 細胞」を活性化する作用があることです。T 細胞には免疫のアクセル役を果たすものとブレーキ役をするものがあります。制御性 T 細胞は、免疫が過剰に働くことをやめるブレーキ役。十全大補湯や補中益気湯は、ブレーキ役を活発に働かせることで、抗アレルギー作用を示すことが分かっています。